法雨山弘済寺蔵
木造 地蔵菩薩坐像
修理報告書
［台座・裳裾・光背］

2022年4月～2023年1月

三乗堂
SANJOU-DOU

修理前現状写真

[図1]台座・光背（正面） 現場撮影(地蔵堂)

[図2]台座（背面）

[図3]台座(左側)

[図4]台座(右側)

[図5]台座(上面)

[図6]台座(下面)

[図7]光背(背面)

[図8]裳裾中央部(表面)

[図9]裳裾中央部(裏面)

[図10]裳裾左側部材(表面)

[図11]裳裾左側部材(裏面)

[図12]裳裾右側部材 (表面)

[図13]裳裾右側部材(裏面)

概要

修理期間	2022 年 4 月～ 2023 年 1 月
名称	木造地蔵菩薩坐像 [台座・裳裾・光背]
指定文化財の種別	南足柄市指定文化財
員数	台座・光背 1 組、裳裾 3 部材
所有者	法雨山弘済寺
所在地	神奈川県南足柄市弘西寺 131　弘済寺本堂 ※地蔵堂の老朽化を受け、本修理を機に須弥壇とともに本堂へ移設した。
所有者住所	同上
制作年代	宝暦 4 年 (1754)
銘記	框部の構造材 (十字) に修理銘の墨書。蓮肉部、蓮弁、反花、受座、蕊に墨書が数箇所見られる。[p.34 に詳細]
修理者	一般社団法人三乗堂 (井村香澄、中愛、森﨑礼子)
施工場所	栃木県鹿沼市下沢 732 番地　三乗堂工房
修理協力	修理アドバイザー：神奈川県立歴史博物館　学芸員　神野祐太氏 鎹復元：八重樫打刃物製作所 搬出 (弘済寺地蔵堂→施工場所)：株式会社谷中田美術 搬入 (施工場所→弘済寺本堂)：日本通運株式会社
修理計画	本修理事業は、2021 年度「本体」修理、2022 年度「台座・光背」修理の 2 か年計画とする。 本報告書は「台座・光背」のみの調書・修理事業を扱う。 また、「裳裾」は台座に付属するものとして本報告書で修理内容を扱う。
助成金	本事業は、南足柄市と公益財団法人文化財保護・芸術研究財団より助成を受けて修理を実施した。

法量 ※修理後 (単位 cm)

総高 (台座・光背)

総高 (光背～框部)	最大幅 (框部)	最大奥 (框部)
188.8	92.0	80.0

台座

台座高 (蓮華座～框部)	台座幅 (框部)	台座奥 (框部)
74.0	92.0	80.0

光背

光背高 (枘～先端)	光背幅 (周縁部)	光背奥 (周縁部)
122.5	86.7	26.4

裳裾

中央部材高	中央部材幅	中央部材奥	左側部材高	左側部材幅	左側部材奥	右側部材高	右側部材幅	右側部材奥
16.5	86.7	36.5	32.3	22.2	7.5	33.4	21.3	8.0

形状

台　座

蓮華座。蓮華部、敷茄子、蕊（上段）、受座、蕊（下段）、反花、上框、下框からなる。
蓮華部は、九方六段の魚鱗葺き。蓮弁は筋彫り。

裳　裾

本体（地蔵菩薩坐像）の裙が垂下する。

光　背

光身は二重円光、周縁部は雲紋の舟形光背。

品質構造

台　座

針葉樹材か。古色塗り・金箔と銀箔の箔押し仕上げ。

〈蓮肉部〉
蓮肉は小材を矧ぎ合わせ、大きく天板、中間部、下部、底板からなり天板と底部には心棒を通すための穴が開く。天板は横 3 材、中間部は中央を四角く刳り抜いた材を上下 3 材、下部は中央を大きく開けて 5 材を矧ぎ、底部は 5 材を矧ぎ下部の中央に生じた隙間を埋める。蓮弁は 1-5 段目は 1 材からなり、蓮肉に竹釘で固定される。6 段目は 2 材からなり、蓮肉に銅釘で固定される。

〈敷茄子〉
4 材矧ぎ。内部の四隅に補強材を貼り付ける。
蕊（上段）は 4 材矧ぎ。

〈受座〉
十字の構造材を組み、その外周八方に各横 1 材を膠で組み付け、上面のみ部材と部材を銅鎹で繋ぎ固定する。横 3 材を矧ぐ天板を乗せる。

〈蕊（下段）〉
十字の構造材を組み、その外周八方に各横 1 材を膠で組み付ける。

〈反花〉
十字の構造材を組み、その外周八方に各横 1 材を膠と上下部材を鎹繋ぎで組み付ける。

〈框部〉
上框と下框の 2 段からなる。それぞれ十字の構造材を組み、その外周八方に各横 1 材を膠と、上下部材を鎹で繋ぎ組み付ける。下框の外周八方の横材の上に別材で飾り彫刻を組み付ける。

〈心棒〉
心棒は下部に彫出した角枘を下框の十字の構造材中央に設けられた四角い枘穴に固定し、台座各段中央に設けられた丸穴を通り蓮肉天板まで貫通する。

裳　裾

木造。古色塗り（弁柄漆）
中央部、右側部、左側部、すべて 1 材からなる。

光　背

針葉樹材か。金箔と銀箔の箔押し仕上げ。
頭光部と身光部は左右 2 材矧ぎ。頭光部の中央に別材の八葉蓮華を銅釘で組み付ける。光脚部に横 1 材を表から矧ぎ寄せる。身光部下部に蓮肉に挿し込むための枘を彫出する。周縁部は 9 材を寄せる。

保存状態・損傷状態 ※調査時

台座

後補	蓮華部～框	・蓮肉と敷茄子の間に竹材を挟む [図 14]。 ・心棒上部にエアパッキンを挟む [図 15]。 ・框部～蕊までの背面の薄板 [図 16]。
表面仕上げの後補	蓮弁～框	・敷茄子、蕊（下段）、上框、下框表面に薄く塗布されている茶色い塗膜層 [図 17-18]。
	蓮弁	・金箔の変色が見られる [図 19]。（銀箔の変色か）
欠失	蓮弁	・1 段目（右側）左から 7 番目左右一部（鼠害）、8 番目右（鼠害） ・2 段目（右側）左から 6 番目右、8 番目先端（鼠害） ・4 段目（正面）左から 3 番目先端 （右側）左から 8 番目先端 ・6 段目（左側）左から 2 番目根本のみ残る [図 20] （正面）左から 5 番目根本のみ残る [図 20] （背面 - 右）左から 7 番目根本のみ残る [図 20]
	蓮肉部	・右側に鼠害による穴 [図 21]。
	蕊（下段）	・彫刻部分 5 箇所。
	下框	・正面上部、右側の下部一部欠失。
亡失	蕊（下段）	・背面右側部材 [図 22]。
	下框	・背面材 [図 23]。
脱落	蓮弁	・4 段目（背面 - 左）左から 1 番目 [図 24] 別箱で保管。 （背面 - 右）左から 7 番目 [図 24] 別箱で保管。 ・5 段目（背面 - 左）左から 1 番目 [図 24] 別箱で保管。 ・6 段目（背面 - 左）左から 1 番目根本のみ蓮肉部に残る [図 24] 別箱で保管。
	敷茄子	・4 つある三角材（補強材か）のうち 3 つが内部に脱落 [図 25]。
虫損	内部構造材	・補強材、台座内部の十字の構造材、心棒にそれぞれ虫損あり [図 26-27]。
汚れ	全体	・全体に煤や埃が堆積する [図 28-29]。 ・鼠のものと思われる生物巣が下框と蓮肉内部にあり、穀物・紙片・木の葉・鼠の糞などがたまる [図 30-31]。 ・蓮弁と蓮弁の間に紙片・木の葉・古銭などがたまる [図 32]。
その他	全体	・心棒がぐらついている。 ・蕊と受座の部材が重さに耐えきれず、半壊している [図 33]。 ・蓮肉部上面に亀裂が生じている [図 34]。 ・各所に使われている鉄釘や鎹に錆が生じている [図 35-37]。

[図14]竹材

[図15]エアパッキン

[図16]蕊・反花・上框・下框 背面材

[図17]敷茄子 茶色の塗膜層

[図18]上框 茶色の塗膜層

[図19]蓮弁 銀箔の変色

[図20]6段目の蓮弁 脱落、欠失

[図21]蓮肉部 鼠害による穴

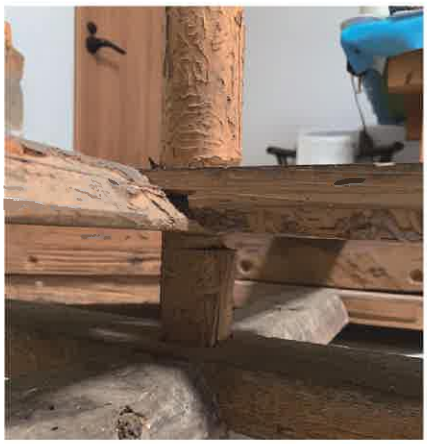
[図22]蕊(右側背面材) 亡失

[図23]下框(背面材) 亡失

[図24]蓮弁 脱落

[図25]敷茄子 補強材 脱落

[図26]台座構造材 虫損


[図27]心棒 虫損

[図28]受座 埃

[図29]反花 埃

[図30]下框(内部) 生物 (鼠か) 巣

[図31]蓮肉部(内部) 生物 (鼠か) 巣

[図32]蓮弁 紙片

[図33]受座・蕊 半壊

[図34]蓮肉部(上面) 亀裂

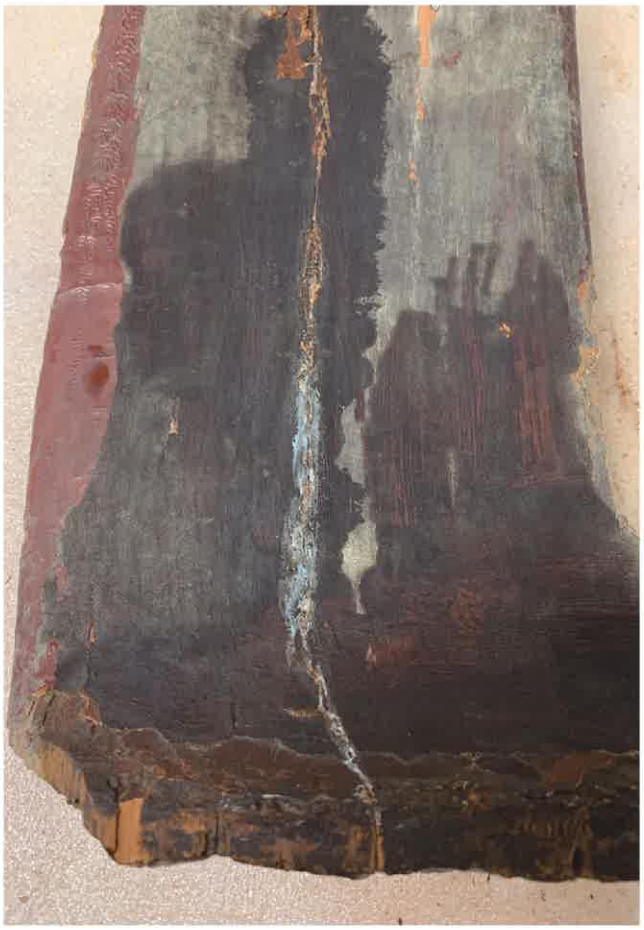
[図35]心棒 鉄釘の錆

[図36]蓮肉部(背面) 鉄釘の錆

[図37]反花と框の(背面) 鉄釘の錆

裳裾

後　　補	・近世の接着剤（木工用ボンドか）がはみ出ている［図 38］。
表面仕上げの後補	・不明
欠　　失	・左側部彫刻［図 39］。
亡　　失	・なし
脱　　落	・左側部材。右側部材。中央部材の一部は蓮肉部より脱落［図 40-41］。
虫　　損	・なし
汚　れ・剝　落	・塗膜層の剝落が著しい［図 42］。



[図38]裳裾左側部材(背面) 近世の接着剤

[図39]裳裾左側部材 欠失

[図40]裳裾左右部材 脱落

[図41]裳裾左側部材(部分)・中央部材(部分) 脱落

[図42]裳裾左側部材 剥落

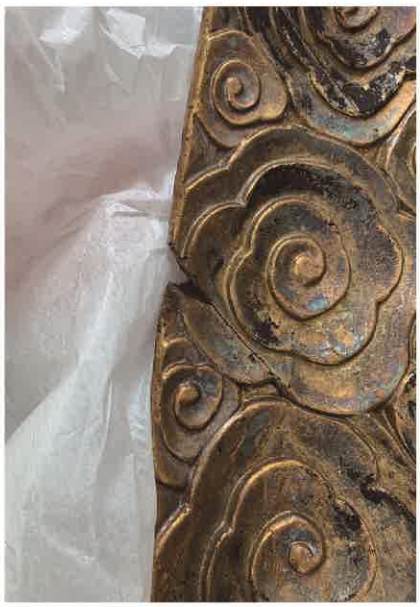
光背

後補	・不明
表面仕上げの後補	・金箔に変色が見られる [図 43]。(近世の塗料や銀箔の変色か)
欠失	・周縁部左 2 箇所、右 3 箇所。八葉蓮華 3 箇所 [図 44-48]。
亡失	・なし
脱落	・なし
虫損	・背面の布張りの下に虫損がある [図 49]。
汚れ・剝落	・全体に煤や埃が堆積する。
その他	・枘が緩く建物の壁に寄りかかっている [図 50]。 ・光脚の彫刻部分が外れかかっている [図 51]。 ・周縁部上部と左、頭光部の八葉、身光部下部に亀裂が生じている [図 53-53]。

[図43]光背 周縁部(中央) 変色箇所

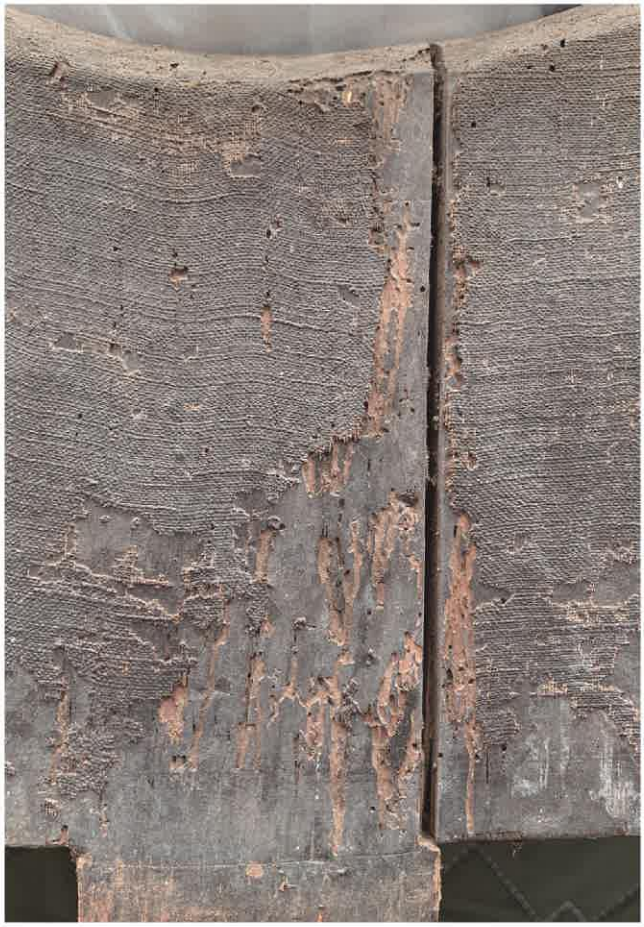
[図44]光背 周縁部(左側) 欠失

[図45]光背 周縁部(右側)欠失箇所


[図46]光背 周縁部(右側) 欠失箇所

[図47]光背 周縁部(右側) 欠失箇所

[図48]光背 八葉花弁(左側) 欠失箇所



[図49]光背(背面) 身光部 虫損

[図50]光背 壁に寄りかかる

[図51]光背 光脚 接着の緩み

[図52]周縁部(左側) 亀裂

[図53]光背 八葉花弁 亀裂

修理方針・仕様

台座内部（蓮肉、框）に生物によるものと思われる堆積物が確認され、また虫損も散見されたことから、作業前に文化財用パナプレートによる殺虫作業を行う。堆積した埃の除去、後補と思われる塗膜層の除去のために乾式・湿式クリーニングを行う。組み付けに緩みが確認できた箇所は部分解体を行う。虫損箇所は薬剤を注入し、含浸強化及び虫穴埋めを行う。欠失・亡失箇所、虫損が著しい箇所はヒノキ材で補作を行い、損傷が小さい箇所には木屎漆を充填する。接着にはすべて膠を用い、補作を行った場所は周囲の色味に近づけた補彩を行う。

台座は組み付けが緩み非常に脆弱であるため、解体した箇所は内部にヒノキ材の補強材を設け接着面積を増やし補強する。また、腐食した鉄釘は撤去し、ヒノキ材で埋木を行ったのち真鍮釘に打ち替える。組み付けには釘の他にも銅製と鉄製の鎹が用いられ、腐食している鎹は釘と同様に撤去し、ステンレス製の鎹に打ち替える。蕊（下段）~ 框部背面にとりつく後補と思われる板材が構造として役割を果たしていないため、撤去し新たな背面材をヒノキ材で設ける。

裳裾は剝落が激しいため、剝落止めを行った後に欠失部分を補作する。

光背は背面の布貼りが所々剝がれていたため、剝落止めを行う。後傾し、建物の壁に寄りかかっているため、垂直に自立できるよう調整する。

主な処置

殺虫作業_p.13
乾式クリーニング_p.13,p.25,p.28
解体_p.14,p.25
鉄釘、鎹撤去_p.15,p.22,p.26
部材撤去_p.15
湿式クリーニング_p.16,p.25,p.26
含浸強化_p.16,p.28
剝落止め_p.25,p.28
虫穴埋め_p.29
補作・補強・組み付け_pp.17-21,p.26,p.29
木屎漆_p.22,p.26,p.29
胡粉下地_p.23,p.27,p.30
呂色漆_p.23,p.30
箔押し_p.23,p.31
補彩・古色_p.24,p.27,p.31

修理材料一覧

・気化性防殺虫剤〈商品名：文化財用パナプレート　国際衛生株式会社〉
・無水エタノール〈健栄製薬株式会社〉
・精製水　〈健栄製薬株式会社〉
・膠　〈商品名：三千本和膠「飛鳥」旭陽化学工業株式会社〉
・ヒノキ材　〈株式会社北原材木店〉
・セルロース　〈商品名：メトローズSM1500 信越化学工業株式会社〉
・エポキシ樹脂　〈商品名：ボンドクイック30　コニシ株式会社〉
・胡粉　〈商品名：白雪印 ナカガワ胡粉絵具株式会社〉
・漆　〈株式会社堤淺吉漆店〉
　生漆　〈商品名：日本産上生漆〉
　黒呂色漆　〈商品名：日本産研出上黒呂色艶消（無油）〉
　赤呂色漆　〈商品名：日本産粘口研出上赤呂色〉
　弁柄漆　〈商品名：練り合日本産研出上赤呂色艶消（無油）・弁柄（美術の友）〉
・金箔　〈商品名：金箔3号断切　株式会社中村製箔所〉
・アクリル絵の具〈ホルベイン画材株式会社〉

修理工程詳細　台座

1. 殺虫作業

搬出時に台座内部（蓮肉、框）に鼠によるものと思われる巣があり、虫損も所々見られたため、ビニールハウスを設置し文化財用パナプレートによる殺虫作業を行った［図 54］。

[図54]殺虫作業風景

2. 乾式クリーニング

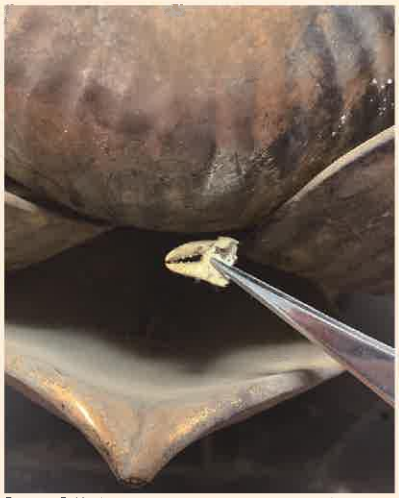
全体に堆積した埃を筆で除去した［図 55-56］。台座内部の鼠によるのものと思われる巣の除去も行った。クリーニング中、蓮弁と蓮弁の隙間に葉・紙片・小銭・カニの爪などが見つかった［図 59］。

[図55]反花 乾式クリーニング前

[図56]反花 乾式クリーニング後

[図57]框(内部) 生物(鼠か)巣除去前

[図58]框(内部) 生物(鼠か)巣除去後



[図59]蓮弁 隙間からカニの爪を確認

3. 解体

台座は１段ずつ取り外した。蓮華、受座、蕊（下段）は接着が緩み隙間も生じていたため、全解体を行った［図60-62］。

[図60]框・反花・蕊(下段)・受座・蕊(上段)・敷茄子の解体

[図61]蓮肉部・蓮弁の解体(表面)

[図62]蓮肉部・蓮弁の解体(裏面)

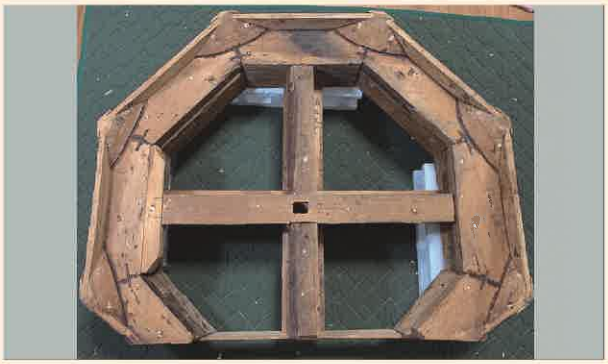
4. 釘・鎹撤去

解体時に錆や緑青が生じた釘や鎹を撤去した[図63-65]。撤去した箇所はヒノキ材で埋木を行った[図66]。

[図63]蓮肉部 鉄鎹撤去

[図64]心棒 鉄釘撤去

[図65]受座 銅鎹撤去



[図66]框(下面) 埋木後

5. 部材撤去

反花・框部の背面材、心棒は本修理で撤去し新補した[図 67-68]。框部の底面材は、取り付けることにより再び汚損物が堆積することが懸念されるため、再利用及び新補を行わなかった[図 69-70]。

[図67]反花・框部 背面材撤去前

[図68]心棒 撤去前

[図69]框 底面材撤去前

[図70]框 底面材撤去後

6. 湿式クリーニング

全体に付着した経年的な埃や汚れ・シミを精製水とエタノールの混合液（1：1）を綿棒にしみこませ除去した [図 71]。接着面にある古い膠は温水を染み込ませたカット綿で湿布を行い、除去した [図 72-74]。また後補と思われる塗膜層は重曹水 (1%) を染み込ませたカット綿で湿布を行い、可能な限り除去した [図 75]。

[図71]蓮弁 湿式クリーニング

[図72]蓮肉部 クリーニング前

[図73]蓮肉部 温水湿布中

[図74]蓮肉部 クリーニング後

[図75]反花 重曹水湿布による後補塗膜除去作業

7. 含浸強化

虫損などにより脆弱になっている箇所はセルロース (1〜3%) を筆で浸透させ、補強した [図 76]。

[図76] 含浸強化処置中

8. 補作・補強・組み付け

各所欠失・亡失箇所が目立っていたため新しくヒノキ材で補作した。また、構造が脆弱な箇所は内部に補強材を新しくあてがった。以下、各段の新補箇所をまとめる。

〈1 段目：蓮華部〉

蓮肉部は、鼠害による欠失箇所を補作し、蓮肉部下部が木の痩せと接着切れにより沈み込んでいたため薄板を嵌入し調整した [図 77-80]。蓮弁は欠失箇所を補作し、釘穴はヒノキ材で埋木を行った [図 81-92]。

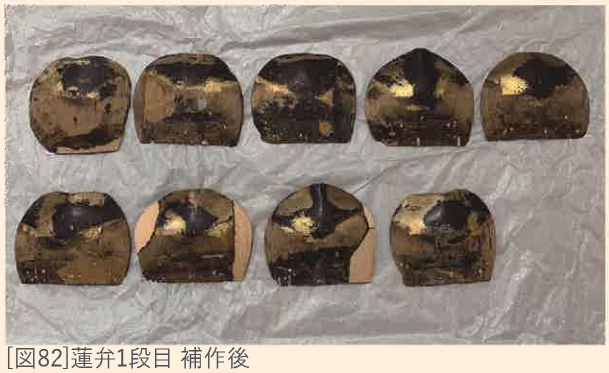
[図77]蓮華部(右側) 処置前

[図78]蓮華部(右側) 補作後 蓮弁の仮組み

[図79]蓮肉部 補作前

[図80]蓮肉部 補作後

[図81]蓮弁1段目 補作前



[図82]蓮弁1段目 補作後

[図83]蓮弁2段目 補作前

[図84]蓮弁2段目 補作後

[図85]蓮弁3段目 補作前

[図86]蓮弁3段目 補作後

[図87]蓮弁4段目 補作前

[図88]蓮弁4段目 補作後

[図89]蓮弁5段目 補作前

[図90]蓮弁5段目 補作後

[図91]蓮弁6段目 補作前

[図92]蓮弁6段目 補作後

〈2 段目：敷茄子〉

敷茄子の内側には 4 つの補強材が現存していたが [図 93]、うち 1 つが虫損により脆弱化しかつ脱落していたため、新補した [図 94]。また、修理前は蓮華座と敷茄子の間に竹製の調整材が挿入され蓮肉部の水平をかろうじて保っていたが、不安定であるため竹材を撤去し、敷茄子上部に調整材を補作した [図 95]。

[図93]敷茄子 処置前

[図94]敷茄子 補強材新補 接着後

[図95]敷茄子 調整材接着後

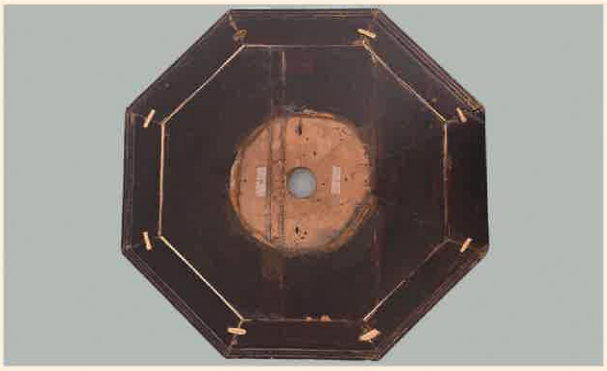
〈3 段目：蕊 (上段)〉

彫刻部分、補強材ともに補作は行わなかった。受座と固定していた釘跡に埋木を施した。

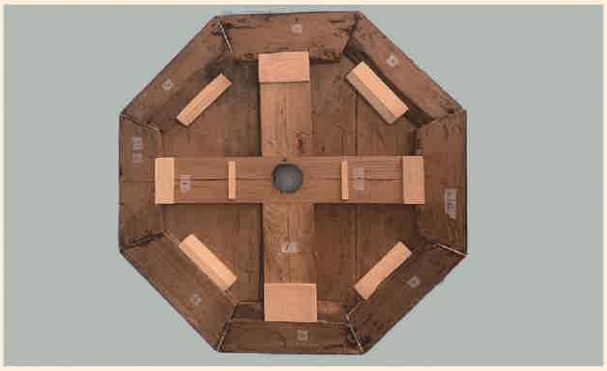
〈4 段目：受座〉

上部の重みに耐えられず天板が沈み込み、外周材同士は鎹で固定されていたがすべての接着が切れていため、重さに耐えられるよう内部に補強材を設けた。また、十字構造材が反っていたため、調整材を入れて天板が水平になるよう調節した。それに伴い、天板や外周の部材に生じた隙間にも調整材を挿入した [図 96-99]。

[図96]受座(表面) 処置前


[図97]受座(表面) 処置後

[図98]受座(裏面) 処置前


[図99]受座(裏面) 処置後

〈5 段目：蕊 (下段)〉

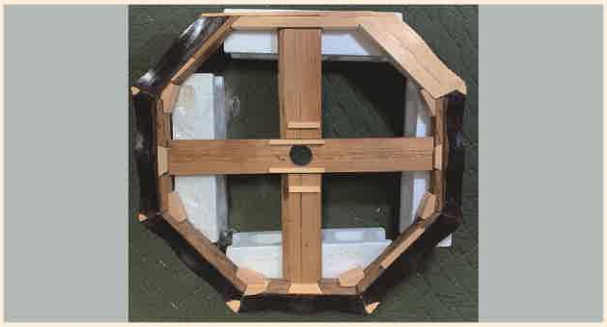
蕊の部材 4 箇所に十字の構造材を受ける枘穴が設けられていたが、隙間が大きく構造材が固定されないため [図 100] ヒノキの調整材を入れた。また、蕊の彫刻部分に生じた欠失 4 箇所を部分補作し、背面右側の亡失箇所および構造材を受ける枘穴を設けた背面材を新補した [図 101-104]。

[図100]蕊(表面) 処置前

[図101]蕊 調整前

[図102]蕊 調整後

[図103]蕊(表面) 処置後

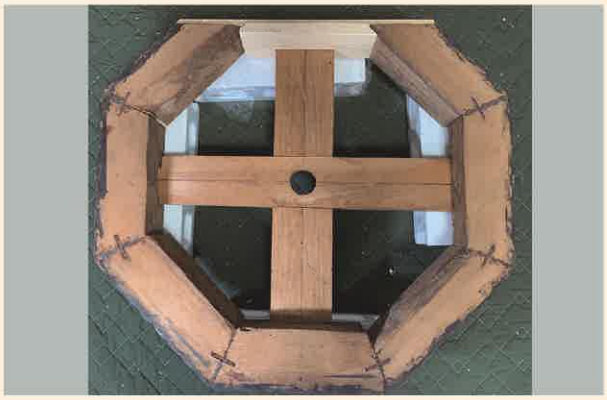

[図104]蕊(裏面) 処置後

〈6 段目：反花〉

役割を果たしていない背面を材撤去後、構造材を受ける枘穴を設けた背面材を新補した [図 105-108]。

[図105]反花(表面) 処置前

[図106]反花(表面) 処置後


[図107]反花(裏面) 処置後

[図108]反花(背面) 背面材 新補後

〈7 段目：框部 (上框と下框)〉

隅脚の鉄釘を撤去し埋木を行った。背面材が構造として役割を果たしていないため撤去し新補した。背面材には構造材を受ける枘穴を設けた [図 109-113]。

[図109]框(表面) 処置前

[図110]框(表面) 処置後

[図111]框(裏面) 処置前

[図112]框(裏面) 処置後

[図113]框 背面材 新補

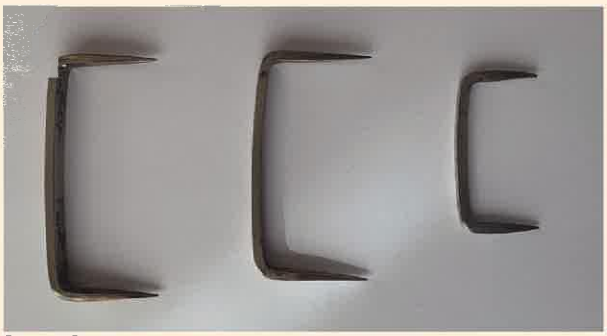
〈心棒〉

虫損が著しいため、ヒノキ材で新補した [図 114]。

[図114]心棒 新補後

9. 釘・鋲の打ち替え

錆予防のため、釘はステンレス製での制作を八重樫打刃物製作所に依頼した [図 115]。新調した鋲は焼き漆を施し [図 116]、元々打ち込まれていた箇所に打ち直した [図 117-119]。



[図115]鋲新調 焼き漆前

[図116]鋲新調 焼き漆中

[図117]蓮肉部(左面) 処置後

[図118]蓮肉部(背面) 釘撤去前

[図119]蓮肉部(背面) 処置後

10. 木屎漆

小さな欠失箇所や補作部材との境界、後補と思われる木屎漆を除去した箇所に新たに木屎漆を充填し、自然な形に整えた [図 120]。

[図120]框部(正面) 木屎漆後

11. 仕上げ

〈胡粉下地〉

補作箇所や虫穴を充填した箇所、仕上げ層が剝落して木地が露出する箇所は、捨て膠（2%）を塗布した後、胡粉（膠濃度 20%）で下地を施した [121-122]。

[図121]全体(正面) 胡粉下地

[図122]全体(右側) 胡粉下地

〈呂色漆〉

新補した蕊の部材は周囲と合わせるため、胡粉下地を整えた後、呂色漆を施した [図 123]。
また、蓮弁は漆箔に備えて下地として呂色漆を施した [図 124]。

[図123]蕊(背面右側) 新補材 呂色漆

[図124]蓮弁 呂色漆

〈箔押し〉

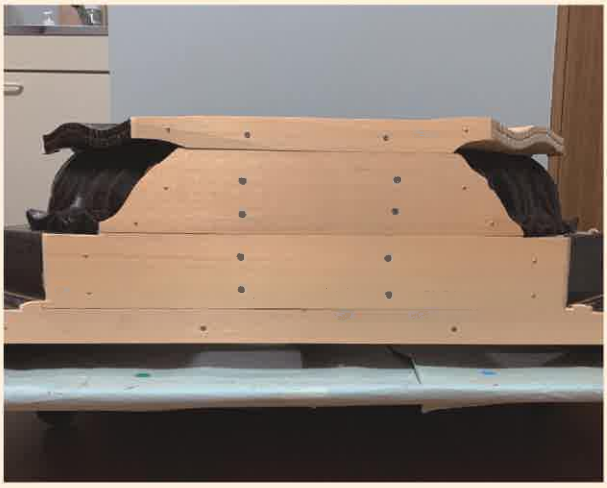
呂色漆を施した蓮弁に箔押しを行った。
また、後世の修理による変色した箔を除去した蓮弁は除去した箇所を補うように金箔を押し直した [図 125]。

[図125]蓮弁 箔押し後

〈補彩・古色〉
修理箇所にアクリル絵の具を用いた古色仕上げを行った [図 126-129]。

[図126]蓮肉部(上面) 胡粉下地

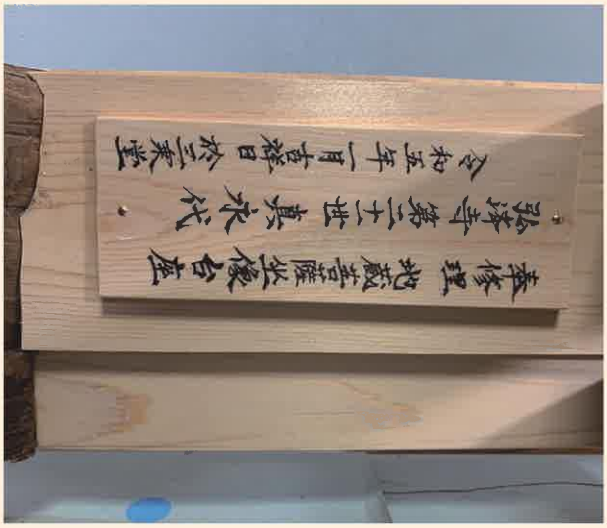
[図127]蓮肉部(上面) 補彩後

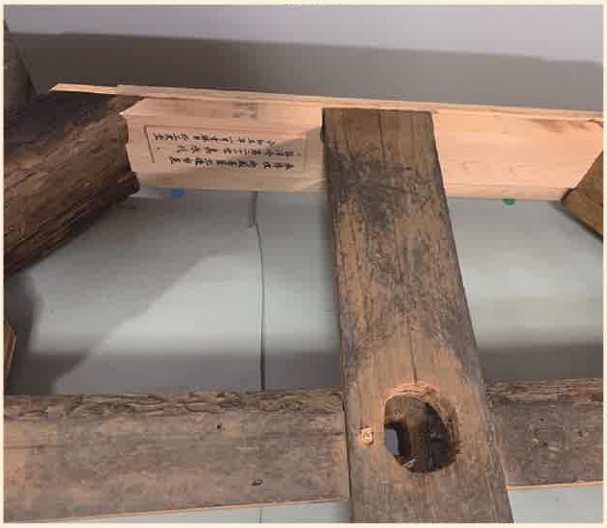

[図128]背面材 補彩前

[図129]背面材 補彩後

12. 修理銘札

今回の修理概要をヒノキの薄板に墨書きし、新補した框部背面材内側に真鍮釘で打ち付けた [図 130-131]。


[図130]修理銘札


[図131]修理銘札 取り付け後

修理工程詳細 裳裾

1. 乾式クリーニング
全体に堆積した埃を筆で除去した。

2. 湿式クリーニング
全体に付着した経年的な埃や汚れ・シミを精製水とエタノールの混合液 (1：1) を綿棒にしみこませ除去した。また、部分的に近世の接着剤 (木工用ボンドか) が使われている箇所は精製水をカット綿に染み込ませ、湿布を行い除去した [図 132-134]。

[図132]裳裾 処置前

[図133]裳裾 湿布中

[図134]裳裾 白濁した接着剤

3. 部分解体
左側の裳裾は近世の接着剤 (木工用ボンドか) で一部材が接着されていたためクリーニングを行いながら解体した [図 135-137]。

[図135]裳裾左側部材 矧ぎ目 処置前

[図136]裳裾左側部材 矧ぎ目 白濁した接着剤

[図137]裳裾左側部材 処置後

4. 剝落止め
塗膜層の剝落が激しい箇所はセルロース (5%) を注射器で注入し、剝落止めを行った [図 138-139]。

[図138]裳裾右側部材 処置前

[図139]裳裾右側部材 剝落止め中

5. 釘撤去

錆が生じた鉄釘を撤去した [図 140-142]。

[図140]鉄釘撤去前

[図141]鉄釘撤去中

[図142]鉄釘 撤去後

6. 補作・木屎漆

欠失箇所は新しくヒノキ材で補作した [図 143-149]。従来部材と新補部材の境界には木屎漆を埋めた。

[図143]裳裾左側部材 処置後

[図144]裳裾右側部材 処置後

[図145]裳裾中央部材(右側上部) 処置後

[図146]全体(正面) 本体と仮組

[図147]全体(左面) 本体と仮組

[図148]全体(右側)本体と仮組

[図149]全体(背面) 本体と仮組

7. 仕上げ

〈胡粉下地〉

修理箇所に胡粉下地を施した [図 150-155]。

[図150]裳裾左側部材(表面)

[図151]裳裾左側部材(裏面)

[図152]裳裾右側部材(表面)

[図153]裳裾右側部材(裏面)

[図154]裳裾中央部材(表面)

[図155]裳裾中央部材(裏面)

〈補彩〉

修理箇所にアクリル絵の具を用いた古色仕上げを行った [図 156-161]。

[図156]裳裾左側部材(表面)

[図157]裳裾左側部材(裏面)

[図158]裳裾右側部材(表面)

[図159]裳裾右側部材(裏面)

[図160]裳裾中央部材(表面)

[図161]裳裾中央部材(裏面)

修理工程詳細 光背

1. 乾式クリーニング
全体に堆積した埃を筆で除去した [図 162]。

[図162]光背 乾式クリーニング中

2. 湿式クリーニング
全体に付着した経年的な埃や汚れ・シミを精製水とエタノールの混合液（1：1）を綿棒にしみこませ除去した [図 163]。また線香や煤の汚れは重曹水 (1%) を染み込ませたカット綿で湿布を行い、クリーニングを行った [図 164]。変色箇所は、今後もさらに変色が進行すると考えられるため可能な限り除去した。

[図163]光背 湿式クリーニング中

[図164]光背 重曹水湿布中

3. 剝落止め
光背背面の布張りの接着力が弱まり、剝落が激しかったためセルロース（3% ）を塗布して剝がれた布の再接着を行った [図 165-167]。

[図165]光背 処置前

[図166]光背 剝落止め中

[図167]光背 処置後

4. 含浸強化・虫穴埋め

虫害などにより脆弱になっている箇所はセルロース (1〜3%) を筆や注射器で浸透させ、補強した [図 168]。木質補強後、虫穴にはエポキシ樹脂と木粉を混合した充填剤をコーンなどを用いて注入した [図 169]。

[図168]含浸強化処置中

[図169]エポキシ樹脂充填前の虫穴

5. 補作・木屎漆

欠失箇所は新しくヒノキ材で補作した。従来部材と新補部材の境界には木屎漆を埋めた。[図 170-174]。

[図170]光背 八葉花弁 処置後

[図171]光背 周縁部(左側) 処置後

[図172]光背 周縁部(右側) 処置後

[図173]光背 周縁部(右側) 処置後

[図174]光背 周縁部(右側) 処置後

6. 枘調整

光背の枘が短く、かつ蓮肉部の枘穴との間に隙間が生じているため後傾し、建物の壁に寄りかかっていた。光背の角度を垂直にし、自立できるよう枘にヒノキの薄板を貼り付け調整した [図 175-178]。

[図175]光背 枘 調整前

[図176]光背 枘 調整後

[図177]光背(正面) 処置後

[図178]光背(右側) 処置後

7. 仕上げ

〈胡粉下地〉

修理箇所に胡粉下地を施した [図 179-180]。

〈呂色漆〉

胡粉下地を整えた後、漆箔に備え下地として呂色漆を施した [図 181]。

[図179]光背(正面) 胡粉下地

[図180]光背(背面) 胡粉下地

[図181]光背(正面) 呂色漆

〈箔押し〉

呂色漆を施した今回の修理箇所に箔押しを行った。また、後世の修理による変色した箔を除去した箇所にも金箔を押し直した [図 182]。

[図182]光背(正面) 箔押し

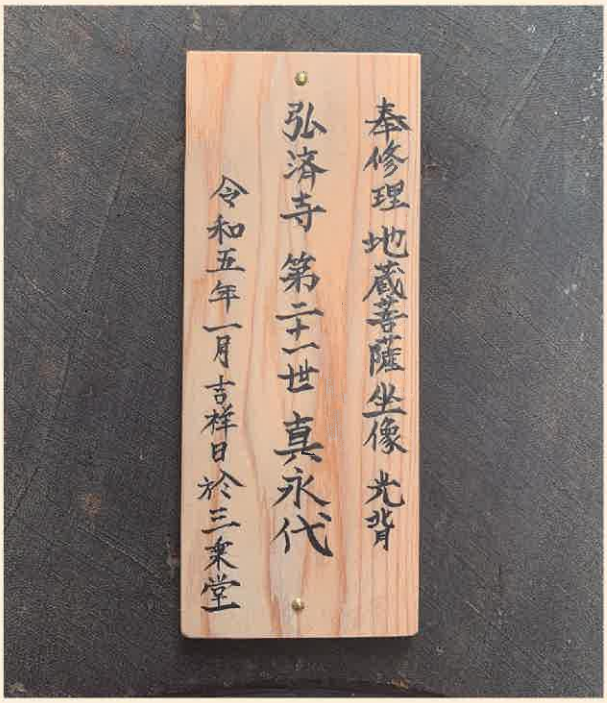
〈古色〉

修理箇所にアクリル絵の具を用いた古色仕上げを行った [図 183]。

[図183]光背(正面) 古色仕上げ

8. 修理銘札

今回の修理概要をヒノキの薄板に墨書きし、光背背面に真鍮釘で打ち付けた [図 184-185]。



[図184]修理銘札

[図185]光背(背面) 修理銘札 取り付け後

現場作業

修理後の台座・光背・裳裾は、神野氏立会いのもと中自宅作業場所から美術専門輸送業者によって運搬された。
須弥壇に台座光背を安置した後、昨年度修理を行った地蔵坐像本体の経過観察を行いながら、蓮肉部への裳裾の取り付けを行った。また、地蔵本体内部に納入品を納めた。

〈裳裾の取り付け〉
蓮肉部、裳裾それぞれ鉄釘が打たれていた箇所を再利用し、真鍮釘で固定した [図 186-187]。
釘を固定した箇所は、木屎漆で整え、胡粉下地を施し、周囲に合わせて補彩を行った。

[図186]裳裾 上からの撮影

[図187]裳裾 真鍮釘固定後

〈光背の調整〉
修理前の光背は光脚部左側底面に隙間が生じていたため、自立が不安定であり前後左右に動きがあった。
本修理で枘の調整とともに左側底面にも調整材を補ったが、修理後の台座光背に本体を安置したところ、本体と光背の正中にズレが生じた。光脚部左側底面部に補った調整材を再調整し、右側底面部にも調整材を補った [図 188-189]。

[図188]光背 底面部(左側) 調整中

[図189]光背 底面部(右側) 調整材

〈本体 納入品を胎内に納入・頭部完全接着〉

台座光背の修理完了後に本修理事業の修理銘札を納入するため、昨年度修理を行った本体の頭部は少量の膠で仮接着を行っていた。首背面側の矧ぎ目の隙間より、温めた精製水を注射器で注入しながら膠を緩め、頭部を取り外した。

頭部を取り外した際、胸飾の一部銅線が切れてしまったため、新たな銅線で取り付け作業を行った。

納入品は、「修理銘札 (元禄 13 年)」「修理銘札 (令和 5 年)」「地蔵尊令和保存修復寄附芳名帖」以上 3 点を納入した [図 190-193]。

納入後は膠 (50%) で頭部を完全に接着した。

[図190]本体胎内に納入する様子

[図191]納入後の胎内の様子

[図192]新たな納入品 修理銘札表裏

[図193]新たな納入品 巻物

〈完成写真撮影〉

本体、裳裾、台座、光背の全てが揃った状態で須弥壇上の安置状況を撮影し、現場作業完了とした [図 194-196]。

[図194]安置状況(正面)

[図196]安置状況(左側)

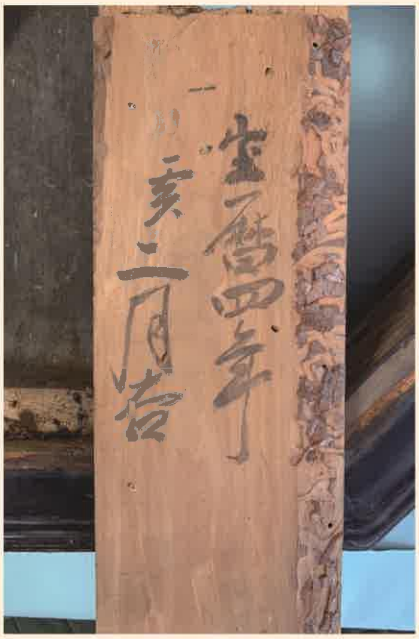
[図196]安置状況(右側)

墨書・銘記

修理銘について

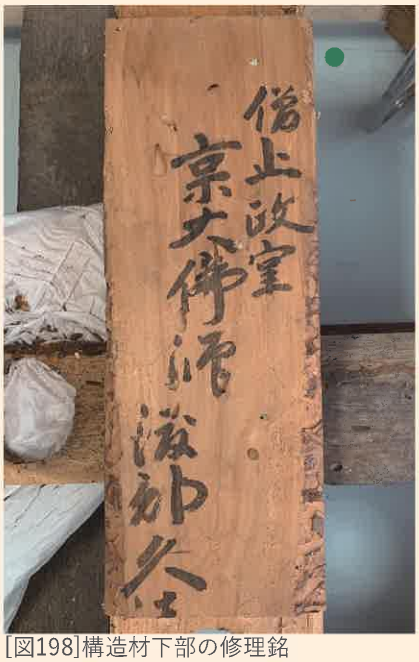
框部の構造材に修理銘が確認できた [図 197-198]。
本体 (地蔵菩薩坐像) は、像様から鎌倉時代〜南北朝時代 (14 世紀) に作られたと思われ、胎内から見つかった銘札により修理が元禄 13 年 (1700) に行われたことがわかった。
今回の台座光背の修理により框部の底面から墨書が見つかり、本体の修理から約半世紀経った宝暦 4 年 (1754) に京大仏師渡部久清によって作られた台座と判明した。
仏師渡部久清は、神奈川県小田原市を中心に仏像製作、仏像修理に携わっていたことが伝わる。

参照：関西大学 文学部 長谷研究室 「近世仏師事績データベース」https://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~hasey/bussi/bunken.htm#



宝暦四年
亥二月吉

[図197]構造材上部の修理銘



僧正政□
京大仏師
渡部久清

[図198]構造材下部の修理銘

台座内部の木地部分に墨書が数箇所見られた [図 199-213]。
そのほとんどが番号であることが確認でき、赤外線撮影調査を通して新たに確認できた墨書はなかった。

〈蓮弁〉

[図199]5段目の蓮弁(裏面)

〈蓮肉部〉

[図200]蓮肉部(右側)

[図201]蓮肉部(正面)

[図202]蓮肉部(左側)

[図203]蓮肉部(下面)

[図204]蓮肉部の接着面

[図205]蓮肉部の接着面

〈受座〉

[図206]受座(裏面)

[図207]受座(上面)

〈蕊 (下段)〉

[図208]蕊(裏面)

〈反花〉

[図209]反花(内部)

〈框部〉

[図210]框部 隅脚

[図211]框部(内部)

[図212]框部(内部)

[図213]框部(内部)

修理者所見

修理痕について

〈茶色の塗膜層〉

台座（敷茄子～框部まで）の茶褐色の塗膜層は後補の修理で、古色風に仕上げるために茶色の塗料を塗布したと考えられる［図 214］。この後補の塗膜層の下から金箔や呂色漆が確認できたことから、元々は蓮弁のような漆箔仕上げだった可能性がある。

[図214]蕊(下段)の表面

〈銀箔の変色〉

台座（蓮弁、蕊、受座）と光背に銀箔が使用されていた。
蓮弁と光背の銀箔は、硫黄で燻して金箔の代用として使った可能性が高い［図 215］。
銀箔の変色は経年とともに金色→赤色→青色（現時点）→黒色（将来）に変色していく。今回可能な限り金箔に押し直したが、本修理で取り切れなかった箇所は今後黒く変色する可能性がある。
蕊、受座の銀箔は、銀箔の上に透漆（すきうるし）を塗り飴色にする「白檀塗」の技法が使われたと考えられる［図 216］。
これらの銀箔がいつの時代に施されたのかは定かでないが、銀箔が金箔より安価なため、修理者が漆工芸の技法を駆使し、金色の台座光背に似せようと施工した可能性がある。

[図215]蓮弁 銀箔の変色

[図216]蕊(下段)(裏面) 銀箔の変色

修理後完成写真

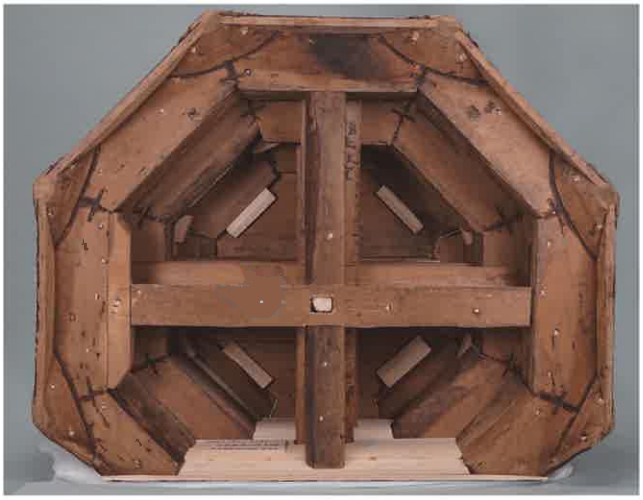
[図217]台座・光背(正面)

[図218]台座・光背(背面)

[図219]台座(左側)

[図220]台座(右側)

[図221]台座(上面)



[図222]台座(下面)

[図223]裳裾中央部材(表面)

[図224]裳裾中央部材(裏面)

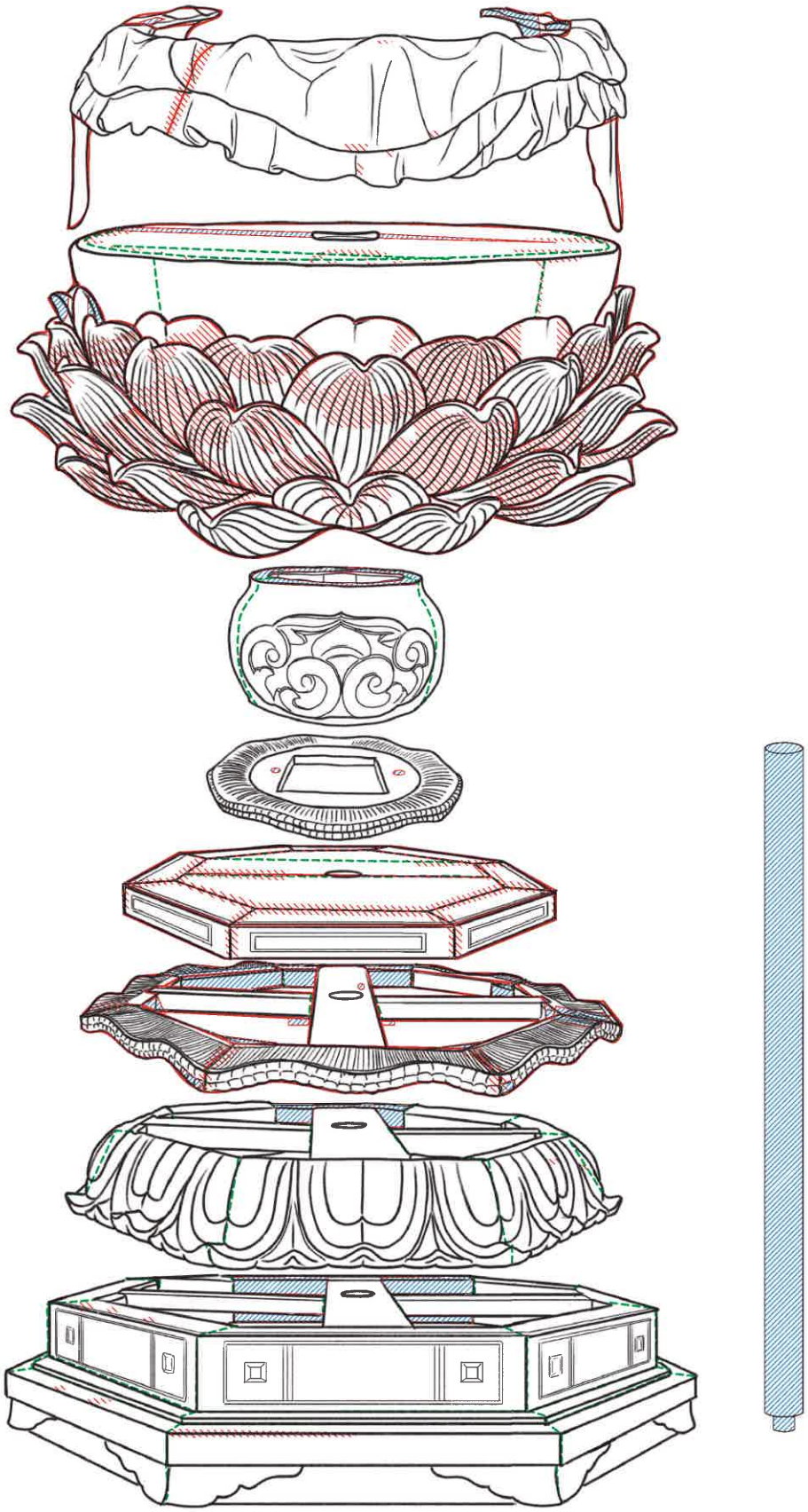
[図225]裳裾左側部材(表面)

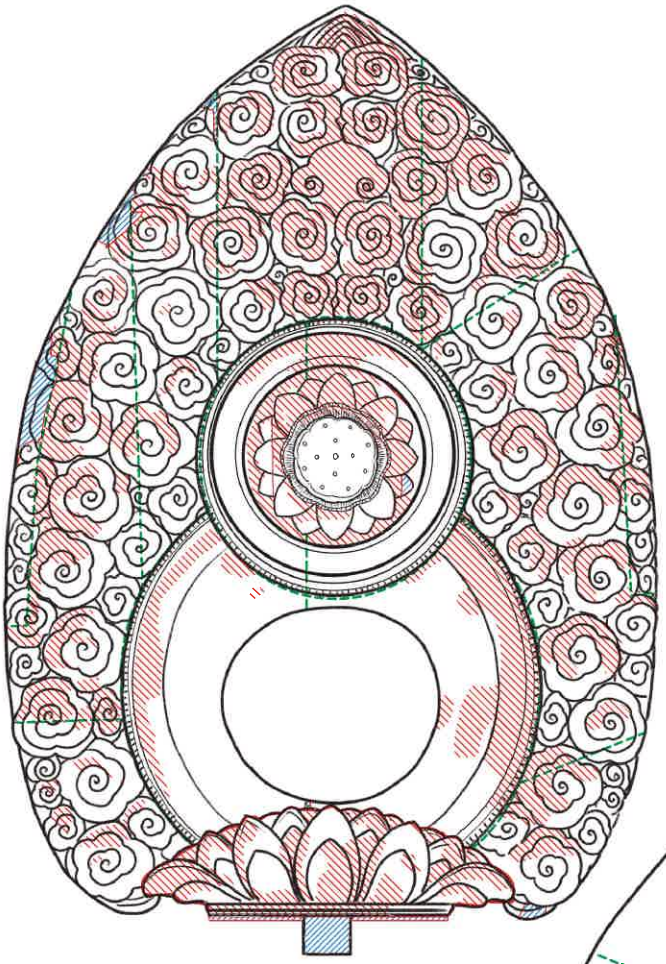
[図226]裳裾左側部材(裏面)

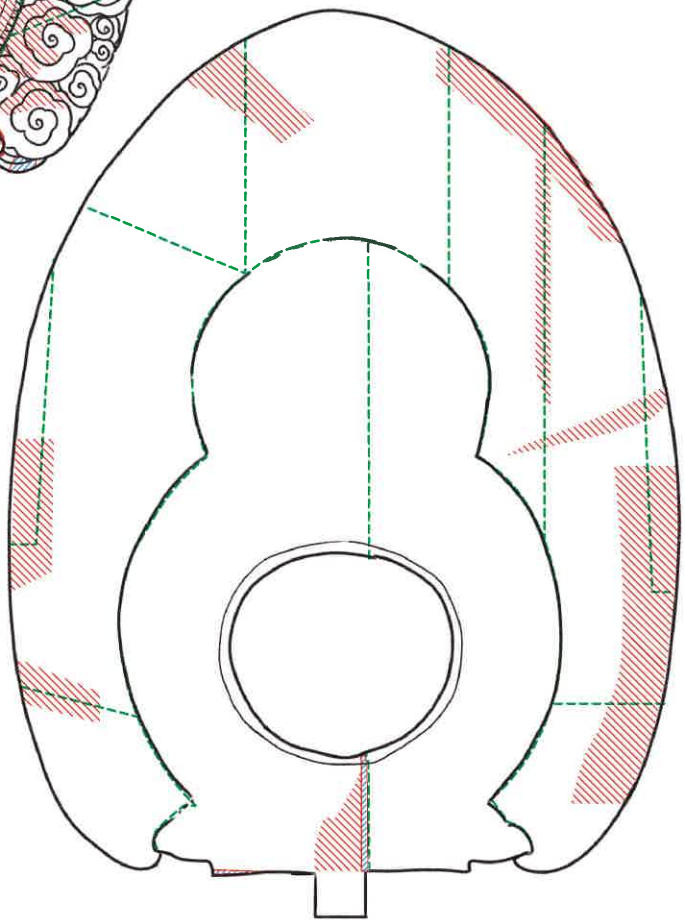
[図227]裳裾右側部材(表面)

[図228]裳裾右側部材(裏面)

修理箇所図解







凡例

・主な修理処置箇所

・新補箇所

・解体または接着箇所

・矧ぎ目
（確認できた箇所のみ記入）

法　雨　山　弘　済　寺　蔵
木造 地蔵菩薩坐像修理報告書
［台　座・裳　裾・光　背］
報告日：2023 年 1 月 22 日
発　行：一般社団法人三乗堂

一般社団法人
三乗堂
〒322-0256
栃木県鹿沼市下沢 732 番地
Tel:0289-78-4809
Mail:info@sanjoudou.org